

平成 18 年 11 月 10 日

## 創立 90 周年記念式典挨拶

阿波製紙株式会社  
取締役社長 三木康弘

本日は、私ども阿波製紙株式会社創立 90 周年記念式典に、木村徳島県副知事様、原徳島市長様、岩浅阿南市長様をはじめ、本当にお忙しい中多数ご来駕賜りまして、誠に有難うございます。90 周年という節目に改めて歴史を振り返り、高い席からではございますが、大変お世話頂いて参りました皆様方に篤くお礼申し上げます。

地域の皆様に支えられ、株主やお取引先の方々のご支援とご協力に依りまして、当社は長きにわたり山を越え、谷を越えて今日を迎えることが出来ました。本日は多くのOB・OGの方々に参加いただいています。また役員幹部ならびに永年勤続表彰者・組合役員が社員を代表して参加しておりますが、厳しい時代にも会社を愛し、会社を信じ共に歴史をつくってきた仲間として共に喜びたいと思います。そしてその積み重ねてきた努力と功績に心より感謝申し上げます。

当社は、大正 5 年に徳島県内の藍商を中心とする有力産業人の出資を戴き、資本金 10 万円で徳島市南矢三町にて設立されました。当時はまだ手漉き和紙が主流である中、機械漉きと言う最先端の技術を徳島県で最初に導入した革新的事業であったと推察されます。これは先見の明とチャレンジ精神が無ければ出来ないことですが、加えて大きな資本力が不可欠でもありました。それらの起業要件を満たすことが出来た要因は、時代の大きな潮流を一様に肌で感じた危機感であったと思っております。

徳島県はかつて藍染めの染料に於いて全国市場の圧倒的占有率を誇り隆盛を極めておりましたが、明治以降海外からの輸入品とりわけ技術革新による化学染料に市場を奪われ衰退の一途を辿っておりました。当然県内の経済界もイノベーションを求められ業態転換や新事業への取り組みが盛んであったようです。私の先祖も時代の変化を先取りして地場産の藍商から染料を輸入する化学品専門商社（現 三木産業株式会社）へ転進するとともに、多くの産業人の賛同・協力を得て阿波製紙を立ち上げました。

第二次世界大戦における敗戦後もいち早く和紙需要の衰退を見込んで、昭和 24 年特殊紙の製造会社「三光工業」を設立しました。昭和 31 年阿波製紙と合併し、和紙メーカーから特殊紙メーカーとして事業再編を図り成長戦略を描きました。方向性は決して間違っていなかったわけですが、経営的には大変厳しい状況が続きました。転機は昭和 43 年現三木相談役が社長に就任され思い切った投資と意識改革により起こり、特殊紙メーカーとして「内容において日本一を目指す」というスローガンの元、躍進が始まりました。加工部門の強化を目指し昭和 54 年日米加工、昭和 57 年リードを設立するとともに、営業拠点として大阪、東京に続き名古屋にも営業所を開きました。昭和 63 年には初めて海外企業と業務提携を結び、委託生産による米国市場への進出を果たしました。平成元年には事業拡大のため新たな生産拠点として阿南工場を建設、併せてリードも隣地に移転しました。今まさにこの阿南工場が成長の原動力となってコア技術を強化する新鋭ラインを増設中でございます。

一方海外事業であります。平成 6 年に合弁事業でタイ・ユナイテッド・アワペーパーを設立し成長著しいアジア市場の強化を図りました。平成 15 年には急速に台頭してきた中国市場を睨み阿波製紙（上海）を設立し本年 1 月より商業生産を始めました。これらにより抄紙機 1 台からスタートした阿波製紙は今年末にはグループ併せて抄紙機 9 台、加工機 11 台の生産体制となります。

今後大きな時代の潮流の変化に対応するための基本戦略は三つです。①独自のコア技術を磨き上げる。②グローバルな事業展開の仕組みを構築する。③産学官との連携による新技術の創出です。これらにより事業領域を拡大し新商品を開発していくことが、お客様満足の追求となり新たな市場創造に繋がることと確信しております。

企業の成長は、働く社員の幸せを追求し、お取引先様の繁栄に寄与し、地域社会の発展に貢献するものであることを肝に銘じ、社員一同一致団結して邁進して参りたいと思います。皆様には今後とも相変わりがせず、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げます。

本日は誠に有難うございました。